後援会討議資料

霧島市をもっと輝かせたい

私が 48 歳で市役所を辞めた理由。

秋丸健一郎

上ではなく、前に立つ。

二十三年間勤務した市役所を三月に退職しました。

「ふるさとのために働くことで給料が貰える。こんな素晴らしい仕事は無い」。十九年ぶりに帰ってきた、あの日の喜びを今も覚えています。

すべての仕事において、「何に基づいて何のためにするのか」を、自分に、そして周囲に問い続け、時には担当の枠をはみ出し、煙たがられることも臆せずに走ってきました。前例を踏襲することを良しとせず、あらゆる業務でこれまで以上の仕事をしたいと言う想いは、自分の物事に取り組む基本姿勢として昇華されました。

市役所生活の大半を過ごしたのは、保健・福祉部門と税部門でした。どちらも市民の生活に密接する窓口職場。私は、訪れる市民一人ひとりの悩み、困りごとを聴き、その方の普段の生活に思いを巡らせ、問題解決のため、努力してきました。

一方で、市政全体に目を向けると、市民の課題や願い、本当に必要なものに、「自分であれば、もっとうまく向き合えるのに。もっと速く、もっと大胆に進められるのに」と、歯がゆい思いをしてきました。

うぬぼれ、と言われるかも知れませんが、コロナ禍をきっかけとして生活、経済、社会全体が大きく変わりつつある今、市政はギアを入れ替えて変わらなければ、霧島市本当に取り残されてしまう…強い危機感を感じているのは、私だけではありません。

自分に問いました。誰かがやってくれるのを待っていていいのか。定年後の六十代では時代とズレているのではないか。上の世代とも下の世代ともつながれる四十代の今では無いだろうか。

後ろ盾もなく、子供たちの学校もまだこれからと言うところで安定した身分を辞める、難しい決断でした。しかし、最後には「自分の力を、もっと霧島市のために活かしたい」という、自らの内なる情熱が勝ちました。

現在、妻、子と一緒に母も同居しています。

私が物心ついた頃からずっと、父は心の病に苦しんで、思うように仕事ができませんでした。母が父の代わりに働いてくれたおかげで、私は良い教育環境で学ぶことができましたが、それ以外の生活は決して恵まれてはいませんでした。父は、私が市役所に入って三年目に入院し、十年前に亡くなるまで、ずっと入院生活でした。

一人息子の私が市役所に勤めることで、母には心配をかけずに暮らしてもらうことができていました。でも、母は今回の私の挑戦を認めてくれました。

「自分の生活の安定よりも大事なことなんでしょう」

亡き父の心まで背負った、やさしく強い母の愛と受け止めています。

天孫降臨から脈々と歴史をつなぐ霧島市を
しっかりと子や孫に引き継いでいきたい。

特定の誰かのための政治ではなく、みんなのための政治。

生きがいを、幸せを感じながら、活発に活動し、自己実現できる。
もっと優しい、もっとワクワクする霧島市。

そこに住む一人でも多くの市民の夢が叶うこと、それが私の夢です。
その実現に向けて進みます。力をお貸しください。

政策コンセプト

つなぐ、とどく、かがやく。『シン』・キリシマ

霧島市が誕生したとき、その可能性に多くの市民が期待をしました。
15年余りが経ち、霧島市はいまだに「可能性を秘めたまち」のままではないでしょうか。

資源と資源がつながることで、その価値はさらに上がっていきます。人と人が繋がることで、支え合い・思いやりが始まり、新しいアイディアが生まれます。広いまちの隅々まで情報がサービスがとどく。市民の意見がきちんとどく、そうすることで、ひとり一人の市民がこのまちに認められている、肯定されている、それを実感できます。そうして、全ての市民を包摂し、全ての市民が参画できるまちとなった時に、霧島市は「可能性を秘めたまち」から「輝くまち」、『シン』・キリシマとなります。

『シン』は『新』しいの意味だけではありません。可能性のまちから脱却した『真』のキリシマ、人と人が『信』じあえるキリシマ、そして天孫降臨、霧島神宮、鹿児島神宮、高屋山上陵の『神』話のまちキリシマ。あなたの『シン』を教えてください。

基本政策 5つの『シン』

『伸』保育・教育

●ふるさとを「つなぐ」。子供を『伸』ばす保育・教育

天孫降臨より脈々と次の世代へつないできた霧島の地。このふるさとを、子や孫に引き継いでいくためには、今いる子供、今から生まれる子供たちを、人を、郷土を愛するように、地域の財産として育てていくことが大事です。子供の力を伸ばすためには、どのような体験・学びをさせるかが重要であり、多様な保育・教育が提供されるよう、現場支援を行います。

『心』保健福祉

●すみずみまで「とどく」。『心』によりそう保健・福祉

広い霧島市。住みなれた地域で住み続けられるように、保健・福祉は、一人も見逃さない取り組みが必要です。与えるという発想ではなく、「補う・支える」。そして、健康寿命を延伸しながら生活の質も向上させ、助けを訴える人だけでなく、「助けて」を言えない人、我慢している人、一人一人の心によりそう保健・福祉をとどけていきます。

『芯』地域経済

●「つなげて」活かす。『芯』の強い地域経済

農林水産業、観光業、製造業、サービス業等をしっかり連動させる。作って、加工して、店に出す。いわゆる六次産業化や地域内の企業間取引の活性化、地元企業が必要とする人材を地元の教育機関で育成、自然や温泉とセットになったリモートワークやコワーキングスペース等、霧島市に既にある人と資源をつなげて、新しいビジネスチャンスを作り出し、地域経済を力強いものとします。

『深』地域の絆

●「つないで」『深』める。支え合う地域の絆

コロナ禍で人と人が直接会う機会が制限されたことで「人と会いたい、話したい」、その思いにあらためて気づかされました。自助・互助・公助と言われますが、核家族化・共働き化で互助が弱っていく中、互助が担っていた部分を自助にばかり押し付けるのではなく、新しい公助の形を示しつつ、人と人をつないでいく。互助の復興に向けた地域の取り組みを支えます。

『進』動く行政

●声が「とどく」。前に『進』む、動く行政

「職員に親切に教えて貰った」等の声を聞く一方、「話が途中で止まった」「市役所は動かない」等と言われるのは何故でしょう。問題は、職員個人が現場で受け止めた市民の思いがとどかない組織の体制にあります。情報共有の不足、意思決定のプロセスや責任の所在の曖昧さ、組織・人員配置のバランスの悪さ等々。「前例が無い」は「断る理由」ではなく「チャレンジするチャンス」と考える組織に作り替えます。

秋丸　健一郎（あきまる・けんいちろう）
年齢：48 歳（昭和 48 年 1 月 15 日生）血液型：O 型
家族：国分新町在住。母（80 歳）妻、子（中３、小２）、猫４匹、犬１匹（県動物愛護センターより譲渡）
出身：隼人町神宮　曽祖父は鹿児島神宮の神職（祝太夫）。
祖父　篤は教員（上小川小校長ほか、宮内小、牧園小、富隈小に勤務）、元保護司。
父　五郎は秋丸建築設計事務所代表。
趣味：バンド活動（英国ロック等）、サッカー観戦（鹿児島ユナイテッド FC 大ファン）
好きな言葉：「ハングリーであれ、愚かであれ」（スティーブ・ジョブス 元アップル CEO）
「命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は、仕末に困るものなり。
この仕末に困る人ならでは、艱難を共にして国家の大業は成し得られぬなり。」
（西郷南洲翁遺訓）

公式ホームページ
秋丸．com

メッセージ動画
どこで撮ったかわかりますか？

E-mail: k16.akimaru@gmail.com

あなたの声を私のマニフェストに！
ご意見を公式 LINE アカウントから
お寄せください。（メール、各 SNS でも可）

経歴

● 宮内幼稚園、鹿児島市立大龍小、ラ・サール中、ラ・サール高卒業（体育祭の応援団で紅軍副団長）
平成 9 年 3 月　鹿児島大学法文学部法学科卒（モラトリアムで、アルバイトとバンド活動〈ロック同好会キックスに所属〉に明け暮れ、1 年半休学し 6 年間在籍。）1 年間のアルバイト生活の後、
平成 10 年 4 月　旧国分市役所入庁。令和 3 年 3 月　霧島市役所退職

在職中の主な業務成果

平成 15 年　パワーリハビリテーション事業の企画
平成 18 年～平成 20 年　合併後の固定資産税土地評価の統一業務の総括
平成 23 年　発達障害の支援機関「こども発達サポートセンター（あゆみ）」の立ち上げ
平成 23 年　児童虐待相談対応のため保健福祉情報共有システム企画・構築
平成 28 年　介護保険の総合事業への制度移行設計、地域のひろば推進事業の企画
平成 30 年　障害者の相談窓口である「基幹相談支援センター」の立ち上げ
令 和 元 年　複数の課にまたがっていた相談窓口を統合した包括的支援機関である「こども・くらし相談センター」の企画立案

その他　統合型 GIS の導入、民生委員・児童委員、民生委員児童委員、地域包括支援センター、成年後見センター、高齢者虐待対応、市立保育園民営化、社会福祉法人指導監査などを担当

●お車でお越しの際、P 駐車場もご利用になれます。

秋丸健一郎後援会　〒899-5106　霧島市隼人町内山田 1 丁目 3-41　TEL/FAX 050-3588-7650